連歌論集二

中世の文

木藤才蔵校注

連歌論集二

中世の文学
三弥井書店刊

連歌論集(二)
中世の文学
第一期第十回配本
定価 八五〇〇円

昭和五十七年十一月五日 初版第一刷発行

©校注者 木藤才蔵
発行者 吉田栄治
製版所 第二製版

発行所 株式会社 三弥井書店
東京都港区三田三―二―六
電話東京(〇三)四五一―九五四〇
振替口座 東京九―一二一二五番

3391-1010-8030
大文社印刷・田島製本

目次

解説……三
凡例……一〇七
長六文……一〇九
心付事少々……一三一
老のすさみ……一三九
発句判詞……一八七
分葉集……二〇七
宗祇袖下……二三五
淀渡……二八一
七人付句判詞……二九七
淺茅……三一五
連歌秘伝抄……三七七
初心抄……四〇七

初学用拾抄……四二
連歌諸躰秘伝抄……四七
索　引……五二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説

長六文

〔構成・内容〕『長六文』は『吾妻問答』（角田川）とともに、宗祇の連歌学書を代表する書であるが、『吾妻問答』が問答体で記されている本格的な連歌概論書といった趣のものであるのに対して、本書は書簡体で記されており、概論書というよりは、技術指導に重点を置いた、実用書といった趣のものである。

本書の構成についてみると、最初に、本書を執筆するに至った経緯を簡単に記した上で、連歌は歌から出たものだが、少し違っている点があるとして、両者の相異点について説き、さらに歌や連歌を詠む者の基本的な心構えについて説いている。以上の部分は、序論であると同時に総論ともいうべき内容のものであるが、つづいて各論に移り、てにをはの用い方・句の付様の事・本歌の取様事・執成の連歌・歌の詞でもって連歌を付ける場合のこと・源氏物語を寄合に用いる場合のこと・人の聞き知らぬことを詠むまじきこと、などについて説いた上で、引き続き、同じ言葉で用い方によって意味の変わる場合のあることについて、さくら花・あやしき・なむ・だに・さへ・いつしか・すさむ・うたかた・みん・五月雨・か・やなどの十二語について、一々例歌をあげて説明している。そのあとで、百韻と千句の座における心の持ち方、百韻の行様などについて説いている。

本書に説く所と『吾妻問答』に説く所とで同一の項目は、本歌の取様と源氏物語の付様ぐらいのもので、それも説

かれている内容は必ずしも同一ではないから、両書はそれぞれあい補う面を持っている。写本の中に両書を合わせて収めているものが多く見出されるのも、そのためかと考えられる。

なお、同じ言葉が用い方によって意味の変わることを中心にして説いた学書に『分葉』があるが、宗祇作であることが確かで内容も比較的多い第二次成立本の『分葉』と本書の関係についてみると、なむ・いつしか・すさむ・うたかた・五月雨の五語が一致する。そこに掲げられている例歌十二首についてみても、そのうちの九首を『分葉』の中に見出すことができる。

〔成立〕　京都大学国語国文学研究室蔵『宗祇指南抄』や法隆寺本(伊地知鐵男氏の紹介による)の巻末に、

文正元年応鐘日　　宗祇作在判

長尾孫六殿

とあり、また、太田武夫氏蔵本は、奥書の年月が、「永正元年十一月廿一日書之」、徳島県立図書館本は、「永正元年応鐘日」となっている。このうち、太田武夫氏蔵本や徳島県立図書館本の巻末に記されている「永正元年」は、宗祇没後の年号であり、「文」と「永」が異なるだけであるから、「永正」は「文正」の誤写と考えられる。応鐘は陰暦十月の異名であるが、太田本だけはその部分が十一月になっており、他の三本と成立の月を異にしている。この相違は、十月と十一月の二度にわたって長尾孫六に本書を書き与えたために生じたものとみるべきではなく、どちらか一方が書き誤ったために生じたものとみるべきであろう。

本書を書き与えた場所に関しては、永禄五年書写の椛山玄佐本その他に、「於武州五十子陳所」とある。宗祇は文正元年夏秋の間、東国に下向、その途中で宗長と対面して清見潟で月を賞して、

月ぞ行く袖に関もれ清見潟

の句を詠んでおり、宗祇の最初の自撰句集『萱草』には、また、「長尾左衛門尉はじめて参会の時、九月尽に」と題する、

秋をせけ花は老せぬ菊の水

の句を掲げてあるから、駿河の国から相模の国を経て、武蔵の国へ入って、長尾一族の人々と連歌会をともにするようになったのは、秋も終わろうとする頃のことであったことがわかる。

本書の冒頭に、「今度者始而参会申聴聞祝著至候。殊御心静申承候条、多年本望当来之思出此事候」云々とあって、本書を宛てた長尾孫六に、はじめて色々と連歌の事を質問されて本書を執筆するいきさつが記されているが、本書にはまた、

たれかはとはん木がくれの庵
すみし世の友さへなしと聞物を

の句を引用した上で、「比一句は、金吾今度あそばし候つる、心底にさしはさみ候間、是に加書申候」とも記している。本書の執筆が十月になされたものとすると、金吾すなわち長尾左衛門尉が、この度詠んだという右の句は、『萱草』に、「長尾左衛門尉はじめて参会の時、九月尽に」として掲げてある宗祇の、

秋をせけ花は老せぬ菊の水

の句を発句とした百韻において詠まれた句である可能性は、きわめて高いものということができよう。しかも、本書の冒頭の言葉を参照すると、宗祇が長尾孫六にはじめて会って連歌に関する質問を、いろいろ受けた席も、右の九月尽の連歌会の会席であったと考えてよいと思う。

それはとにかく、この九月尽の連歌会に参会した関東の好士たちの連歌への熱意は、宗祇を深く感動させたようである。本書の冒頭にみえる「殊御心静申承候条、多年本望当来之思出此事候」などという文面も、宗祇のその時の率

直な気持を述べたものであったと考えてよいと思う。その後間もなく、『吾妻問答』を著述した宗祇は、角田河原近きあたりの連歌の好士たちが、京都で彼が接触した好士より、ずっと連歌に心ざしが深いように思えたので、後の世の思い出にもと思って連歌についての自分の考えを少しずつ語っていったとも記している。

本書を宗祇が書き与えた長尾孫六について、伊地知鐵男氏は、その著『宗祇』において、「景忠か、景仲（昌賢）の子景信の弟忠景と同人か」とされている。それに対して、両角倉一氏は、忠景は孫太郎と称していたので、この場合の孫六は、忠景の養父にあたる人物で、内閣文庫蔵『長尾系図』に、「修理亮、景棟者長尾芳伝忠政嫡男也、山内仁勤仕須、文明十年卒」と記されている惣社長尾家の当主景棟とされている。[注1]

〔諸本〕　本書には多くの写本が伝えられており、その中には、宗祇自筆と伝えられている写本や、宗祇在世中に書写された本をはじめ、室町期の古写と考えられる貴重書も五指に余るが、原本の面影をそのまま伝えていると考えられるような本は、一本も存しない。どの本にも何らかの誤脱を有している。次に管見に入った二十二本を中心にして、簡単な書誌を記しておく。

1、太宰府天満宮蔵本

一巻。室町時代写本。縦二五・六センチ、幅四〇センチ余りの料紙九枚を継いで、全長三七四センチ。その後に後補の別紙一枚を継いである。表紙の題簽には、「此一巻宗祇法師筆也」とあり、極札を貼りつけたものの由。内題はない。巻末には、いたづらに君なしつめそもしほ草　の歌はなく、

宗祇（花押）

坂東　長尾孫六殿　参

とある。金子金治郎編『連歌貴重文献集成』第六集に、その影印と、湯之上早苗・両角倉一氏による解説を収めて[注2]あり、本稿もそれによって記した。

2、岩瀬文庫蔵本

袋綴一冊。外題はなく、本文の最初に「宗祇法師連歌伝書」と記す。一丁表から三〇丁裏まで本文。三一丁表に、

右連歌の一巻は宗祇師自筆の書也。こたひ校書して世に伝ふるもの也。

嘉永六次癸丑歳春二月　水島永政

とある。太宰府天満宮本を書写したものと考えられ、巻末の奥書も同じであり、本文もほぼ一致する。

3、書陵部蔵鷹司本（266　92）

袋綴一冊。縦二六・五センチ、横一九・五センチ。二丁表から本文。黒色の十行罫紙に記す。二丁表右上隅に、「鷹司城南館図書印」がある。表紙左肩に、「宗祇連歌和歌之条々」と、うちつけ書きに記す。安政四年写本。太宰府天満宮本と巻末の奥書が一致するだけでなく、本文も共通点を多く有する。

4、東京大学付属図書館蔵本（A00、6039）

袋綴一冊。縦二二・三センチ、横一七・九センチ。表紙左肩に、うちつけ書きに、「すみた川」、一丁表中央には、「すみた川集」と記す。二丁表から二五丁表まで、『すみた川』。二五丁裏白紙。二六丁表から三九丁裏まで、『長六文』。『長六文』に関しては、外題・内題ともになく、本文の最初に、「同文ニ云」とあって本文に移り、巻末には、

長尾孫六殿　　宗祇　判

悪筆といひあやまりあるへきといゝ不可有他見」者也

明応四年四月廿二日

とある。明応四年の古写本。なお、表紙裏にはってある極め札には、「周防山口衆　宗祇門弟吉秀」とある。

5、家蔵本

袋綴一冊。縦二四・一センチ、横二〇・三センチ。外題なく、本文の最初に、「同文ニ云」とあって、本文に移る。最後の一丁を欠く。室町末期写本。もと『角田川』と合綴してあったものを、切り離して改装したもののごとくである。

6、和中氏蔵宗祇連歌書本

袋綴一冊。表紙左肩の題簽に、「宗祇連歌書」とあり、内題はない。前半は『長六文』、後半は『宗砌塵抄』。巻末に、

長尾孫六殿進覧　宗祇在判

作之後年序ヲヘテ

此本宗祇一見候て相違候所被直候

とある。[注3]

7、龍谷大学付属大宮図書館蔵本（911-3、33）

袋綴一冊。縦二八・八センチ、横一九・八センチ。表紙左肩に題簽剥落のあとあり。内題もない。一丁表から一五丁表まで本文。一五丁裏から一六丁表に、付句二十句を記す。

巻末に、

長尾孫六殿進覧候　宗祇在判

此本作之後年序をへて一見候て相違之所被直候

文明六年甲午十一月廿九日

とある。近世初期写本。

8、和中氏蔵室町末期写本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

袋綴一冊。外題はなく、一丁表中央に、

角田河廿六ヶ條永禄八年三月下旬書之

とあり。前半は、『角田河』、後半は、『長六文』。『長六文』の本文の前に、「又状ニ書加之」とある。全冊同筆で、室町末期の写本。巻末に、

長尾弥六殿進覧之　　宗祇

とある。[注4]

9、和中氏蔵一本

袋綴一冊。江戸時代初期写本。表紙中央に、

連歌　角田河及淀渡

とあり、一丁表の中央にも、「連歌　角田河并淀渡」とあって、『長六文』の書名は見えない。最初に、『角田河』、その次に『長六文』、最後に『淀渡』を収む。『長六文』は、端作に「長尾弥六かたへ宗祇遣状」とあって本文に移り、巻末には、いたづらに君なしつめそもしほ草の歌のあとに、ただ、「宗祇　判」とだけ記してある。『淀渡』の本文を記したあとには、

雖後見多憚依為早安先書写之

明応四年三月日　　宗祇

とある。[注5]

10、徳島県立図書館蔵本（W911.1　イ1）

袋綴一冊。縦二〇・二センチ、横一四・二センチ。本文二六丁。外題・内題ともになく、巻末に、

永正元年応鐘日　宗祇

長尾孫六殿

とある。永正は文正の誤写か。江戸時代末期の写本。[注6]

11、京都大学国語国文学研究室蔵本（コ、G6、6）

袋綴横本一冊。縦一二・八センチ、横二〇センチ。表紙左肩の題簽と表紙裏中央に、「宗祇指南抄」と記す。表紙裏中央に記してある分は、本文と同筆とみてよい。巻末に、

文正元年応鐘日　宗祇作在判

長尾孫六殿

とある。江戸時代初期かそれ以前の写本。

12、伊地知鐵男氏蔵本

江戸時代末期写本。宗祇初心抄（心敬連歌十五体）・隅田川・淀の渡・宗牧発句集（択善集）と合冊され、奥書に、「右五部一冊三井寺宝照院権僧正寛寿の本をもて写す　天明乙巳五月十八日始六月八日終功　本邨成寿識」とある由。『連歌と俳諧』昭和十一年三月号所載の、伊地知氏執筆の、「宗祇連歌著作解題」による。なお、『連歌と俳諧』昭和十一年六月号に所載の同氏執筆の『長六文』の解説によれば、この『長六文』は、内題は、「長尾孫六かたへ宗祇遺状」とあり、柱には、「長六文」とあって、奥に、

天正十八年庚寅五月下旬書之　主成家

の識語を有するという。

13、椛山玄佐書写本

東京大学史料編纂所蔵の影写本によれば、最初に『長六文』の本文があって、その巻末に、

於武州五十子陣所　　宗祇在判

長尾孫六殿進覧之候

とあり、その次に、「当世連歌嫌詞少々しるし申候」とあって嫌詞を記し、その次に、『吾妻問答』の本文を収め、最後に、

不断光院御下向之刻此一札拝領之者也

永禄五年六月吉日　　椛山安藝入道　初花押　玄佐後花押

とある。不断光院は、永禄五年（一五六二）、島津貴久の招きで鹿児島の不断光院に移って、その開山となった清誉をさす。

14、京都大学付属図書館蔵本（平松、七、レ-15）

袋綴一冊。縦二二・八センチ、横一五・七センチ。外題も内題もなく、帙および書名カードには、「連歌ノ事」と記す。一丁表から三五丁表まで『長六文』。巻末に、

於武州五十子陣所　　宗祇在判

長尾孫六殿進覧候

とあり、ついで「当世連歌嫌詞少々しるし申候」とあって、嫌詞三十六語を記したあとに、『吾妻問答』を収め、最後に、

天正十九年三月上旬写之　　矢田寺舜長

とある。江戸時代初期の写本。

15、内閣文庫蔵本（202、224）

袋綴一冊。縦一九・五センチ、横一五・三センチ。表紙左肩に　うちつけ書きに、「連歌書」と記す。内題はない。一丁表から一八丁裏まで、『長六文』。巻末には、京大平松本と同じ奥書を有し、ついで『当世連歌嫌詞』と『吾妻問答』とを収めてある。江戸時代初期の写本。

16、天理図書館蔵本（れ、1.2、45）

袋綴一冊。縦二四・七センチ、横一六・八センチ。表紙左肩に、題簽の剝落した跡がある。一丁表左脇に、

長尾孫六殿江進覧状　宗祇在判

とあり、三丁表から本文。『長六文』のあとには、「不審書」と題して、『連秘抄』を収めてある。室町時代末期の写本。

17、大阪天満宮文庫蔵海人のしわさ本（れ、11、19）

列帖装一冊。縦二三センチ、横一六・一センチ。表紙の左肩に、うちつけ書きに、「海人のしわさ　宗祇」と記してあるが、後人の筆。一丁表から本文を書き始めているが、この表だけ紙が全体に黒ずんでいるのは、久しく表紙を欠いていて、表紙の役割をしていたためであろう。内題はなく、巻末に、

於武州五十子陣所
長清孫六殿進覧候　宗祇在判

とあり、そのあとに、

明応第五端午下七写此一札」欲学得六義而已
書をくも袖こそぬるれ」もしほ草」いつかむかしのあとゝ」いわれん

とある。

18、大阪天満宮文庫蔵宗砌書合綴本（丙、23、1）

袋綴一冊。表紙の左肩に、「六文宗砌書」と、うちつけ書きに記す。内題はない。巻末に、

於武州五十子陣所　　宗祇

長尾孫六殿進覧之候

右一巻宗牧自筆とて有しを」うつしをくもの也。老筆と見えて」所々よみかたきを其まゝに記しぬ」其上本のふりたれは紙もやつれて」不審のところ多し。重て類本を以て」あらたむへき也。

とある。ついで『宗砌書』（『宗砌田舎への状』）を収め、巻末に、山内三郎右衛門尉直氏の奥書があって、そのあとに南曲とある。江戸時代末期写本。所々朱筆で校合してある。

19、大阪天満宮文庫蔵一紙品定合綴本（れ、11、1）

袋綴一冊。縦一九・九センチ、横一四センチ。一紙品定・知連抄三儀五躰・長六文・宗砌田舎への状の順に合綴。表紙の左肩に題簽の剥落した跡がある。内題もない。巻末に、

於武州五十子之陣所　　宗祇在判

長尾孫六殿進覧候

右御本は近衛殿御判有ニ而令書写」京衆夫土佐屋形ニ而」天正十九年七月廿日うつす也

とあり、全体の巻末には、

山内三郎右衛門尉直氏花押

とある。合綴本はすべて同筆で江戸時代初期の写本。それぞれの奥書のある本を、山内直氏が、あわせて書写したものであろう。

20、京都大学国語国文学研究室蔵一本（コ、Gb、9c）

袋綴一冊。縦二四・五センチ、横一八・八センチ。前半は、『心敬法印庭訓』、後半は、『蜑のしわさ』。外題・内題ともに、「蜑のしわさ」とある。巻末に、

於武州五ケ子陣所　宗祇在判
長尾源次郎殿進覧

此抄物藻汐草の詞によりて後世」蜑のしわさと名付しよし

とある。江戸時代末期の写本。

21、太田武夫氏蔵本

横本一冊。江戸時代写本。『老のすさみ』と合綴。巻末に、

永正元年十一月廿一日書之　宗祇
於武州五十子陣所
長尾孫六殿進覧

とある。この太田本は、伊地知鐵男氏によって、『連歌と俳諧』昭和十一年六月号に全文が翻刻されており、この稿も、その本文と解説によって記した。

22、宗祇連歌伝書本

袋綴一冊。外題も内題もない。東京古典会創立七十周年記念『古典籍下見展観大入札会目録』に、「宗祇連歌伝書」として、「宗祇自筆、十九枚、山口焉休添状、古筆勘兵衛折紙」とある。巻末に、

於武州五十子陣所　宗祇
長尾孫六殿進覧之候

とある。室町時代の写本。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com